

『李文忠公事略』の出版と呉汝綸（白 春岩）

『李文忠公事略』の出版と呉汝綸

早稲田大学 社会科学総合学院 助教

白 春岩

要旨

1901(光緒 27)年、西太后の主導により政治改革、いわゆる清末新政が開始された。教育改革がその一環として行われており、呉汝綸は教育制度を視察するため来日した。『東遊叢録』(全 4 巻)がその成果の集大成として三省堂書店より出版されたが、注目すべきことには、呉汝綸により『李文忠公事略』(李鴻章の伝記)も同時に三省堂書店から出版されたのである。呉はなぜ『李文忠公事略』をわざわざ日本で出版したのか。この書物はどのような価値があり、李鴻章研究にどのような示唆を与えてくれるのか。本稿は以上の問題の解明を目的とする。

はじめに

『李文忠公事略』は、呉汝綸が「学政」(教育制度)を考察するため 1902 年に来日した際に、三省堂書店から出版された。当時の李鴻章の伝記について言えば、まず梁啓超の執筆した別名『李鴻章伝』という著作が想起される。これは李鴻章が逝去して僅か 2 ヶ月後に出版され、広く読まれている著作であった。しかし、呉汝綸が執筆した『李文忠公事略』のほうは、あまり注目されたとはいえないであろう。

そもそも、呉汝綸は清朝末期に活躍した桐城派の代表人物であり、文学家、教育家であった。曾國藩、李鴻章の幕僚としても活躍した。「当時、内外の重大問題に関し、その多くは曾國藩、李鴻章の二人が決定した。しかし、彼らの上奏文の多くは呉汝綸の手によるものであった」[筆者訳 以下同](時中外大政常決於國藩、鴻章二人、其奏疏多出汝綸手)との資料があり¹、呉汝綸が幕僚として果たしていた役割の大きさを窺い知ることができる。

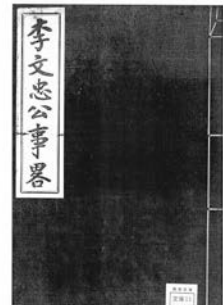
吳汝綸は、1889(光緒15)年に李鴻章の推薦により保定蓮池書院の長となり、清末新政(光緒親政とも言う)の際、さらに京師大学堂(北京大学の前身)の総教習に任命された。吳が学校の教育制度を考察するため来日したのは、この京師大学堂総教習に着任する直前のことである。吳は約4ヵ月滞在し、日本の教育家を訪問、学校を見学し、学校の施設・教育機器などを細心に観察した。また造船所、造幣所、病院、印刷局、電報郵便局、警視庁、裁判所、監獄などにも足を運んでいる。吳は、これらの観察した成果を『東遊叢録』(全4巻)にまとめ、帰国する前に三省堂書店に印刷と出版を依頼した。清国の教育制度の改革に関しては、この著作の中に日本の学校制度の創設・発展の経緯について詳細な記録を残しており、また日本教育界の著名人による清国の教育制度への助言なども収録している²。しかし、より注目すべきことは、本稿が考察対象とする『李文忠公事略』が『東遊叢録』と同時期に、三省堂書店より出版されていたという事実である。

管見の限りでは、吳汝綸が日本で『李文忠公事略』を出版した経緯、この書物の内容および史料的价值、さらには李鴻章研究に与えた示唆に関して、未だに検討されていない。したがって、本稿ではまず『李文忠公事略』の概要を紹介しながら、上記の問題点を明らかにしていきたい。

一、本書成立の背景

『李文忠公事略』は22丁から成り、そのサイズは23.8×15.2 cmである。本の扉には、吳汝綸自身による「李文忠公事略」という揮毫があり、次の頁に李鴻章の肖像が一枚ある。奥付に「明治35年10月13日印刷」、「明治35年10月17日発行」と明記され、著者は清国吳汝綸、発行兼印刷者は亀井忠一(日本東京市神田区裏神保町1番地)、発行所は三省堂書店(日本東京市神田区裏神保町1番地)、印刷所は三省堂印刷部(日本東京市神田区三崎町河岸12号)と、それぞれ記されている。

明治35年とは1902(光緒28)年のことで、吳汝綸はこの年の6月9日に随員とともに大沽を出発し、長崎、



(図1) 『李文忠公事略』
早稲田大学中央図書館所蔵

神戸、大阪、京都をめぐり、6月28日に東京に到着した。その後、10月15日に東京を離れ、帰国の途についたので、日付から見ると『李文忠公事略』は、吳が東京滞在中にその原稿を三省堂書店に渡し、一行が東京を離れてからすぐに出版されたことが分かる。

なお、『李文忠公事略』は『近代中国史料叢刊』（第071輯、沈雲龍主編、文海出版社、1971年）や、『吳汝綸全集』（吳汝綸撰、施培毅、徐寿凱校訂、黄山書社、2002年）にも収録されているが、本稿では1902年に三省堂書店より出された初版を検討の対象とする³。また資料を引用する際、旧漢字を常用漢字に改め、適宜句読点を付した。

二、本書出版の経緯

『李文忠公事略』の執筆動機と出版経緯について、吳汝綸は序言で次のように記している。

李文忠が薨去した後、門下の人びとは各行省で專祠を建立するよう朝廷に申請した。しかし、彼らは李鴻章の経歴に詳しくなかったので、私(汝綸)にその経歴を著し、各行省に郵送して採択に備えるように依頼した。その後、各行省ではみな詳しく調査し各自で文章を作成したので、私の原稿は採択されなかった。しかし、今、日本に来たところ、私の息子は行李からその原稿を取り出し、出版することを考えている。文忠(李鴻章)の事績については、国家の史実に関連するだけではなく、国内、海外の誰もがともに知りたいものである。そこで、出版を息子に許すことにした。本書の由来を記録すれば、以上の通りである。壬寅九月、吳汝綸記す。(李文忠公薨後、門下士慮各行省、請建專祠、不得公事实。属汝綸代撰事略、分寄各省、以備採択。其後各省皆自別撰、考核加詳備、拙稿不足復存。今来日本、兒子自行篋檢出付印。念文忠事蹟、関国家掌故、又海内外所願共聞見也。聽其印行、為識其緣起如此。壬寅九月吳汝綸記)

以上の短い文章から、次のような二つの事情を窺い知ることができる。

第一に、『李文忠公事略』は李鴻章祠堂の建立に由来する書物だったことである。李

が1901年11月7日に逝去すると、その祠堂を建立するため、門下の人びとは彼の業績が残る各行省に、その略歴や業績を収集するよう提言した。そこで、李の経歴に詳しい呉汝綸がこの仕事を一任されたのである。その背景には、李鴻章と呉汝綸の公私にわたる親密な交際があったことが窺われる。

第二に、『李文忠公事略』の出版には、呉汝綸の息子が大きな役割を担っていたことである。「今、日本に来たところ、私の息子は行李からその原稿を取り出し、出版することを考えている」という一文から、『李文忠公事略』の出版は呉の一人息子、すなわち呉闔生により成し遂げられたことがわかる。呉闔生については、『中国文学大辞典』には次のような紹介文がある。

呉闔生(1878-?) 近代の詩文の作家である。字を辟疆といい、安徽省桐城の人。呉汝綸の息子。幼い時、姚永概に教えを受け、のち賀濤についた。かつて日本に遊学したが、父の病のため帰国し、その後は都で10余年教鞭をとった。(呉闔生(1878-?) 近代詩文家。字辟疆。安徽桐城人。呉汝綸之子。幼時受教於姚永概、復從賀濤游。曾游学日本、后因父病回国、講学於京師10余年)⁴

さらに、実藤恵秀の研究によれば、呉闔生にはまた江北、啓孫、辟疆、北江などの別名があり、呉汝綸が来日する前に早稲田大学で留学生生活を送っていたという。1902年に『和文釈例』を著し、のちに浮田和民の『西史通釈』、矢津昌永の『改正世界地理学』、山根正次の『婦女衛生学白話』、天野為之の『万国通史』(2冊)を翻訳した。呉汝綸が来日していた間、呉闔生は父とともに公私の場に出席した⁵。

さて、『李文忠公事略』の出版元の三省堂書店についてもここで簡単に触れておきたい。

三省堂書店の創設者である亀井忠一(1856-1936年)は、明治時代から昭和前期にかけて日本の出版業界で活躍した人物である。1881年に東京の神田で古本屋三省堂を創業し、同時に出版事業にも進出した⁶。三省堂書店のホームページによると、1881(明治14)年4月、三省堂書店は「古本屋」として誕生した。当時の日本は社会及び教育体制などの方面で欧米の知識を積極的に吸収していた。創業者の亀井忠一は文化交流の重要性を感じ、英、米、独、仏の「ことば」を解説し、辞書の編纂・出版事業に取り組んだ。書籍の流通と出版事業の発達を通じ、知識情報の伝播を推進しようとした。そ

うした取り組みにより、今日の三省堂書店の礎を築いたのである⁷。

『李文忠公事略』の出版に際し、呉汝綸はなぜ三省堂書店を選んだのか。以下、その理由について考えてみたい。

まず、呉が同時期に上梓した『東遊叢録』から説明したい。注目すべきことは、『東遊叢録』と『李文忠公事略』の印刷及び発行日は同一であり、それぞれ1902年10月13日と同年10月17日である。呉は『東遊叢録』の原稿を三省堂書店に提出した際、『李文忠公事略』を同時に出版社に渡していたことが推測できる。呉はなぜ多数の出版社の中から三省堂書店を選んだのか。実藤恵秀は、呉汝綸が古い学問、新しい学問ともに十分に理解し、国字改革問題にも理解を示し、簡字運動も援助したことがあるので、故に近い理念をもつ三省堂書店に『東遊叢録』の出版を委ねた、とその根拠を求めている⁸。ちなみに『東遊叢録』は中国の技術では当時、不可能だった「洋装菊版」である。

それでは、三省堂書店ではなぜ『東遊叢録』と『李文忠公事略』の出版を引き受けたのか。その理由を考えるのに、まず、呉汝綸が来日した際における日本各界の反応を見てみたい。

五品官の呉は日本で熱烈な歓迎を受け、明治天皇にも謁見した。また呉の弟子たちが整理し出版した『東遊日報訳編』によれば、『東京朝日新聞』、『大阪朝日新聞』、『西京新聞』、『東京時事新聞』、『報知新聞』など40社近くの新新聞社が、呉汝綸一行を追跡し報道している⁹。呉が日本滞在中、大きな反響を呼び起こしたことが明らかである。当時の新聞業界の激しい競争より考えれば、『東遊叢録』を出版することが、自社の宣伝となり、販路における利益も獲得でき、さらに永遠にその令名を残すこともできるという「一石三鳥」というべき成果が期待できる。このため、出版社の経営、販売という角度からみて、『東遊叢録』が三省堂書店より出版されたのは、呉と出版社との双方の利益が一致した結果であった。

さらに、呉汝綸と三省堂創始者の亀井忠一との個人的な関係も重要である。『呉汝綸全集』の中には次のような記録がある。

呉は同文会会員の日戸に誘われ、江の島を訪れた。「この日、招待方の三省堂の主である亀井忠一は、夫人及び二人の息子を引率し同席した」（是日為主者三省堂主人亀井忠一率其夫人及二子与席）と記されている。呉は亀井の招待を感謝して詩を詠んだ。「亀井先生両二郎、文能書記武剣舞。国風所重矜旅人、詩翁酒徒紛龍虎。安得結客少年場、

鄒衍九州看一挙」¹⁰。亀井は呉と私的な関係もあったことが窺える。

これらの事情から、呉は『李文忠公事略』の出版を三省堂書店に依頼し、また三省堂も呉の依頼を引き受けたと推測できるのである。

三、本書の内容

『李文忠公事略』は以下の内容からなっている。「護理直督周玉山方伯奏李文忠事跡疏」、「山東建專祠事略」、「江蘇建專祠事略」、「浙江請建專祠事略」、「福建專祠事略」、「河南專祠事略」、「上海專祠事略」、「天津專祠節略」、「京師請建專祠呈稿」。以下、それぞれの文の内容を概観しておこう。

3.1、護理直督周玉山方伯奏李文忠事跡疏

周馥(1837-1921年)字は玉山、号は蘭溪。安徽建徳(今東至)の出身。李鴻章の補佐として洋務事業に30年以上も従事しており、李の信頼を受けた人物である。

この文章では、まず皇帝が光緒27年9月27日(李が逝去した当日)に下した勅旨を引用し、朝廷の李に対する評価及びその祠堂を建立する由来について言及している。次いでに李鴻章が内政、外交において成し遂げた実績を略述する。それによれば、李は「翰林」として出仕したが、太平天国の乱を鎮圧する際に江蘇巡撫になって「武人」に変身し、軍功を立て「一等肅毅伯」に封じられた。その後、捻軍を鎮圧する際、曾國藩の代行として両江総督に就任、また湖広総督となり、捻軍の乱を平定した。ついで、直隸総督兼北洋大臣に就任した際は、「都の近辺を鎮守し」(坐鎮畿輔)、「三十年一日の如く」(三十年如一日)内政、外交に尽力した。罹災者を救済する際は、「分け隔てをせず、苦勞を厭わなかった」(不分畛域、不辭勞瘁)。洋務運動を推進した際には、「西洋式機械に習熟し、製造局を開設して兵器彈藥を製造し」(練習西器、設局製造軍火)、「海軍、武備、輪船、電報、各学堂を設けた」(開弁水師、武備、管輪、電報各学堂)という。また、「旅順、威海衛における砲台、船の碇泊所を建築した。西洋人はそれを通過するたび、それに目を奪われ互いに驚き怪しむほどであった」(修築旅順、威海台壘船澳、西人過者、輒指目以相驚詫)。「李が苦心して運営したのは海軍であった」(苦心經營、尤在海軍)、などと記されている。

一方、外交問題についても、「数十年来、内外に問題が起きるたび、李鴻章はその処理を担当し、すべて巧みに解決した。これにより李は各国に重視され、高く評価された」（数十年来、中外一有嫌隙、經李鴻章維持其際、無不立為解釈、由此各国推重）、ともある。米国元大統領グラントは、李鴻章がドイツのビスマルク、イギリスのグラットストンと肩を並べる「天下賢相」の三人の一人だと絶賛した。総じて、吳は「国のことを謀って忠誠であり、決断も英明であつた。より所のない議論に左右されず、毀誉を顧みなかった」（謀国忠誠、決策英断、不揺浮議、不顧毀誉）ほどの「忠勤愛国」者として、李鴻章を高く評価している。

3.2、山東建專祠事略

山東省で李の祠堂を建てたのは、李鴻章に山東省における2回の捻軍鎮圧、中英「煙台条約」の締結（1876年）、黄河治水（1899年）による功績があつたからである。

捻軍は1850年代から60年代にかけて、中国の華北地域に広がった農民反乱である。捻軍鎮圧に際し、曾国藩は上奏文において、「捻軍鎮圧の軍功は李鴻章の謀によるものである」（平捻之績、推服李鴻章之定謀）と、李鴻章の役割を高く評価した。李は1876年にマーガリー事件の処理を担当して、「煙台条約」を締結し、イギリスが狙っていた利益を与えなかった。さらに黄河治水の際においては、「従来を率いた大臣は外交に不案内であり、反対に外交に詳しい人は治水の事が分からない。ところが、李鴻章は西洋の法律に詳しく、外交政策を最も得意とした。西洋式武器を配備してこれを訓練したが、その治水においてもまた多くの場合、西洋のやり方を採用した」（向來將兵大臣、不明外交、明外交者、不明河事。李鴻章究通西法、於外交尤有專長。其用兵創習西國槍砲、其治河亦多採西說）と、李鴻章が西洋式の方法を活用し、さらに効果を収めたと述べている。

3.3、江蘇建專祠事略

「江蘇は李鴻章が出世し、功を立てた地であり、多数の故事が伝わっている」（江蘇為李鴻章發跡立功之地、流傳故事最多）とあり、その内容から江蘇で李の祠堂を建立した事情が判明する。

具体的には、1862年に李は江蘇巡撫に任命され、僅か6500人の淮軍を率いて上海に着任した。着任後、常勝軍の力を借りて太平天国軍を鎮圧し、同時に「各国の軍事力

が強い理由は武器にある」(各国兵強、由於器利)という事を痛感した。そこで、李は積極的に西洋の先進的な技術を導入し、「西洋の機械を改造して利用するため、直ちに三つの局を開設し、これを製造した」(改用西械、旋開三局製造)とあるように、自国の力で西洋式武器を作る事業に取り組んだ。これが洋務運動の幕開けである。

江蘇巡撫在任中、李は江蘇省の減税を上奏して裁可され、住民の負担を軽減させた。また被災者を救助し、荒地を開墾するなど「民事にも心を尽くした」(尽心民事)ことも記されている。

なお、蘇州の李鴻章祠堂は、現在の山塘街にあり、正門の横に蘇州市人民政府が2002年10月に立てた額がある。それには「蘇州市文物保護單位 李鴻章祠」と書かれており、現在は学校として使用されている。

3.4、浙江請建專祠事略

この專祠事略は、李鴻章が江蘇で太平天国の乱を鎮圧した際、「その余威をもって、浙江省の東と西の民を災難から救い出した」(以其余威、拔浙東西生民於水火)という内容であり、李には「浙東」、「浙西」で「現場近くで指揮し、食糧を用意して救済した」(就近指揮、籌餉接濟)という実績があった。これに対し、曾国藩は、「李は蘇州の人民を危険から救い出しただけでなく、東南の大局においてもすべて李鴻章の余威に頼って平定できたのである。儒者が成し遂げた事業の中で、これは未曾有のことである」(不特全吳生靈、出水火而登衽席。即東南大局、胥賴余威以臻底定、儒生事業、近古未有)と、高く評価している。

3.5、福建專祠事略

李鴻章の福建省での功績として、「左宗棠を援助し、漳州の農民反乱を鎮圧した」(助左宗棠剿賊漳州)ことと、「沈葆楨に助力して台湾出兵の日本軍を防衛した」(助沈葆楨御倭台湾)ことが挙げられている。前者は左宗棠が太平天国の乱を鎮圧した際、李が淮軍8000人を上海から福建に派遣して戦功を立てたことを指す。また、後者は1874年に日本が台湾出兵をした際、李が徐州に駐在していた唐定奎の銘軍6500名を派遣し沈葆楨に援助したことを指す。日本による台湾出兵の際、李は、「急いで戦争を始めてはならない」(勿遽開衅)、「恥を忍んで自重すべきである」(忍辱負重)と、沈葆楨に助言した。「李は小さな怒りを忍び、遠謀を図り、戦術に甚だたけていた。これ以降、軍艦

の購入、海防計画の議論が始まった」（忍小忿而図遠略、賢於用兵遠甚、自是購鉄艦籌海防之議始起）とも記されている。

3.6、河南專祠事略

李鴻章には河南省で軍を率い捻軍を鎮圧した戦功はなかった。しかし、「中州の中心地が積年に渡る戦乱から脱することができたのは、みな李鴻章が運河の防衛に尽力したおかげである」（中州腹地、幸脱積年兵燹之苦、皆李鴻章堅持防運之力）とある。また、1877、78（光緒 3、4）年間、河南省での災害救援に尽力し、1887、88（光緒 13、14）年に鄭州（河南省にある）で黄河氾濫が発生した際、李鴻章は天津にいたにもかかわらず、「知恵を絞って代わって計画し、自分の仕事のように取り扱った」（竭慮代謀、視同事事）と記されている。この時は、イギリスの香港総督、欧米の官僚及び商人、アジアでは日本、シャム、シンガポール、フィリピンなどの国や地域でもその援助活動に積極的に参加した。このような国境を越える大規模な救援活動は未曾有のことであったが、「みな李鴻章一人の呼びかけによるものであった」（皆李鴻章一人号召鼓舞之所致也）と、李の人望と努力について言及している。

1877、78（光緒 3、4）年の災害は「丁戊奇荒」と称され、中国の華北地方で発生した稀に見る大規模な旱魃災害である。その際、山西省と河南省の被害が一番大きかった。その災害救援に際しても、李鴻章は自らの権限を最大限に発揮し、災害への援助は海外にまで及んだ。この一例もまたよく李鴻章の人望と影響力を物語っている。

3.7、上海專祠事略

上海は李鴻章が登場した初舞台であり、淮軍の重要な財源を生み出す都市でもある。李は江蘇巡撫として上海で太平天国軍と戦った際、「必ず自ら戦いを指揮」（必躬親督戦）した。これに対し、「従軍して十年、出陣して敵を殲滅する経験のなかった」（従軍十載、未嘗臨陣手殲一賊）曾國藩は、「これは大きな恥である」（為之大愧）と、自省している。

天津に移った後、李鴻章は上海で輪船招商局、電報局、織布局を開設した。「臣宣懷はみな自らその事に与り、李の功績を詳しく知っている」（臣宣懷皆躬与在事、知之尤詳）との記述がある。この記述から「上海專祠事略」の作者は盛宣懷であったことが判明する。輪船招商局が成立した後、「いくたびの難局に遭ったが、李鴻章は必ず手を尽

くしてこれを保護した。これは、輪船招商局における李鴻章の実績であり、その第一のものである」(屢遇傾危、李鴻章必百端維護、此成績之在輪船招商者一也)。後に、李は中国で幅広く電線を敷設し、「中国境内の權益をようやくみな取り戻し、上海がその中心地となった。これは、電報事業における李鴻章の実績であり、その第二のものである」(中国境内、權利始尽收回、而皆以上海為匯歸之地、此成績之在電報者二也)。1892(光緒18)年、李は上海で紡績局を創設し、「中国で経済における大きな利益を開拓した。これは、紡績業における李鴻章の実績であり、その第三のものである」(終開中国大利、此成績之在紡績者三也)と、盛宣懷は李鴻章の上海における実績をまとめている。さらにこれらの実業は「官督商弁」という形をとったが、李鴻章はこれらの実業を全力で保護し、誰にも比べられないほど重要な役割を果たした、と盛宣懷は李の実績を評価している。

なお、上海に建立された上記の祠堂は、現在、復旦中学となっている(華山路1626号)。

3.8、天津專祠節略

まず、「李鴻章は内乱を平定し、外国からの侵略を防いだ。直隸において二十余年も総督を担当し、外交を担当する期間が最も長かった。恥を忍んで重い責任を負い、精魂を傾け忠実であった。もっとも海防を己の任務と考えていた」(李鴻章削平内乱、即以防御外侮為事、移督直隸二十余年、弁理外交最久。而忍辱負重、殫竭血誠、尤以防海設備為己任)、と天津における李鴻章の功績を概観している。李鴻章は直隸総督兼北洋大臣を担当し、天津に滞在した期間、日本による台湾出兵、マーガリー事件の処理、「煙台条約」の締結、清仏戦争、日清戦争など、「数十年来、国家の外交の大計は往々にして李の一手により決められていた」(数十年来、国家交渉大計、往往定於一手)のである。これらの多数の活動の中で、李が一番心血を注いだのは海防である。1874(同治13)年の海防大討論の際、李は「変法と人材以外に海防の方法はない」(舍変法求才、別無下手之方)と論破した。その後、北洋海軍を建設し、財源難に直面したが、李はその大事業を「独力でやり抜いた」(独力興弁)のである。そのほか、留学生の海外派遣、学堂の開設、器械の製造、軍港の建設、砲台の建築、鉱山の開設、鉄道の敷設など、一連の洋務業績を成し遂げたが、日清戦争ですべてが水の泡になってしまい、さしもの李も批判の矢面に立たされた。しかし、このような状況に対し、「中国海軍の失敗は

船や大砲に差があったためであり、人による過ちの結果ではないと日本人が自ら言明している」（日本人亦自言、中国海軍之敗、実由船炮不敵、非人材之咎）と、李鴻章のために弁解している。海軍を建設するには財源が重要であり、しかし「糧食（軍事費）を調達することは、李鴻章の権限を越えている」（籌餉一事、非李鴻章所能主持）と、主張している。

この専祠節略では、また当時存在した李に対する五つの認識を取り上げている。すなわち、①李鴻章は国のために人材を育てていなかった。②船と大砲は全て自分で造るべきで、外国から購入すべきではなかった。③海防事業は李鴻章が一人で担当したが、有事の際、頼りにならなかった。④海軍提督に丁汝昌を委任するのは失敗であった。⑤淮軍はすでに活力に欠け失敗は必然であった、の五条である。これに対し、天津専祠節略ではこの五つの認識を逐一批判した。結論として「甲午の役（日清戦争）の際、日本軍の実力がすでに強大となっており、臣は朝鮮にいたのでそのことを目の当たりに見ていた。日本が必ず戦争を引き起こすことは明白であった。しかし、李鴻章がなお隣国との和解を考えたのは、彼の判断が遅かったということではない。李は日清双方の実力を熟知し、軽々しく乾坤一擲の挙に出ることはできなかった。当時の批判する世論はこうしたことを理解していなかったが、李は一言も弁解しなかった」（甲午之役、日本兵勢已成、臣在朝鮮、親所聞見。知其必出於戰、而李鴻章猶望隣国之和解、非其見事過遲、良由深知彼己、不敢輕擲孤注。時論既不相諒、李鴻章始終無一言自明）と記してある。李鴻章は時局を洞察し、自分と相手の状況を完全に理解していた。ゆえに真正面から日本と戦おうとしなかった。しかし、朝野の誹謗に対し、李は「世人の誹謗に一任」（聽世人之訾毀）し、一言も弁解しなかった。「いにしえの大臣のように、侮辱に耐えるという風格があった」（有古大臣強力忍詬之風）と、李の行動を高く評価している。

ところで、この文中には、「臣は朝鮮にいたのでそのことを目の当たりに見ていた」という表述一節があり、この表現からこの文章の作者は吳汝綸ではないことが推察できる。吳は日清戦争の際、国内にいたからである。さらに文末には、「臣は随従すること最も久しく、最も深い交際を忝くした」（臣某從事最久、相知最深）とあり、本文の作者は李の幕僚として勤めた期間が一番長かった周馥ではないかと推測される。日清戦争の際、周馥は「兵營の事務を統括し、諸將と連絡し戦況を検討する」（總理營務処連絡諸將体察軍情）という仕事を担当し、軍需を調達していたからである¹¹。

3.9、京師請建專祠呈稿

勅旨には「本籍及び手柄を立てた省で祠堂を建築する」（令原籍及立功省份建立專祠）という内容があり、さらに都には漢族出身の大臣の祠堂は存在しなかった。ゆえに、李鴻章のために、北京で祠堂を建立することはまず考えられないことであつた。しかし、北清事変（義和団の乱）の時、李鴻章は、「苦勞を厭わず、すぐれた弁舌の才により、七、八の強国及び何万人の強兵と対峙し」（不辭勞瘁、掉三寸筆舌、以与七八強国、数万勝兵相持）、清が王朝を開いて以来「二百余年未だ見たことのない功績」（二百余年未見之功）を立てたので、北京で李鴻章のために祠堂を建立するという、異例の願いを上奏したのである。

以上、九つの文章にわたり、『李文忠公事略』の内容を概観した。「護理直隸周玉山方伯奏李文忠事跡疏」、「天津專祠節略」の作者は周馥、「上海專祠事略」の作者は盛宣懷であることが確認でき、その他の文章の作者は呉汝倫であつたと考えられる。李鴻章の祠堂を建立するため作成した文章であるため、一様に李鴻章を称賛する論調を取っている。

四、本書の広告文

三省堂書店は『李文忠公事略』と『東遊叢録』を宣伝するため、日本の新聞『読売新聞』（図2）と『朝日新聞』に広告を掲載した¹²。

この広告では『李文忠公事略』及び『東遊叢録』の出版事情を紹介しているが、そのうち『李文忠公事略』について以下のように述べられている。

呉先生、李鴻章の幕賓たること殆んど三十年、蓋し天下李公を知るハ呉先生に如く者なかるべし、先生巻首に記して曰く、「李文忠公薨後各行省專祠を建るに当り、公の事実を得ざるを慮り、汝綸に属



（図2）『読売新聞』1902年11月8日朝刊 第5版

して代て事略を選ばしめ、選択に備ふ」と、以て此書の内容を知るべきなり

さらに、この広告には『李文忠公事略』は最良の和紙を使い、「支那的に装綴」しており、値段は30 銭であることも明記している。

『東遊叢録』と同じように¹³、『李文忠公事略』も吳汝綸が帰国後、北洋官報局により再度出版され、李鴻章研究に貴重な資料を残している。

五、吳汝綸と李鴻章

『読売新聞』の広告の中で「天下李公を知るハ吳先生に如く者なかるべし」という文面がある。以下、李鴻章と吳汝綸の関係を考察する。

日清戦争で清国が惨敗し、不平等条約「下関条約」が締結されると、国内では失脚した李鴻章は厳しい批判にさらされていた。例えば、陳宝箴（直隸布政史）は直奏し、時代の悪弊を陳述したうえで李鴻章を批判した。この批判を契機として、吳は陳との間で議論を繰り返した。吳は次のように述べる。「中国では変法をせず、士大夫は自らその自負する空虚な議論を固持して清議と自称している。これでは、たとえ李相（李鴻章）より10 倍の才力があっても、なお必ずしも弱い力を強い力に転じることはできない」（中国不変法、士大夫自守其虚驕之論以為清議、雖才力十倍李相、未必能転弱為強）、「李相は変法、自強の必要を数十年呼び続けたが、応じる人はいなかった。このことは歴年の上奏文から証明することができる」（李相之欲変法自強、持之数十年、大声疾呼、無人応和、歴年奏牘可復按也）¹⁴。

1902 年に吳汝綸は日本への視察から帰国する途中、わざわざ日清講和談判の場所である下関を訪れ、「傷心之地」という字を残し、その心境を吐露している¹⁵。

また、1896 年11 月19 日（光緒22 年10 月15 日）、吳は李の幕僚である潘藜閣への書翰の中で、「倭事（日清戦争）以来、傳相（李鴻章）は中国の士大夫たちに唾を吐きかけ罵られている。これは、政府がその口火を切り、後進の士人がそれに附和したからである。弟（吳汝綸）が考えるには、傳相（李鴻章）は遠大な計画を30 年にわたって実行してきた。前の10 年の間の事はすべて上奏文に残っている。中間の10 年は上奏文を幕僚に頼むことがあったものの、総理衙門への書翰はみな自ら作成していた。

後の10年は重要な事件を処理する際、みな電報を利用したが、これは他人に依頼するのではなく、必ず自らその取捨を決定していた。今、この三つの時期の内容を集め、書籍にしようと考えている。そうすれば、傅相が歴年にわたり難局を乗り越え、努めて富強を求めて苦心してきたことが、すべてこの書籍に記録されることになる。これもまた誹謗を止めさせる一つの方法である」(自倭事起至今、傅相為中国士大夫所唾罵、此由政府揚其焰、而後進之士、聞声和之。弟以為傅相經營遠略三十年、前十年事俱在奏稿。中十年、則奏稿尚或假手幕僚、至總署信函、則全系親筆。後十年、則機要事件、皆在電報、亦不肯請人代弁、必出親裁。現擬將此三者輯錄成書、則歷年支持危局、力求富強之苦心、俱在簡冊、亦止謗之一道也)と、書いている¹⁶。吳汝綸は李鴻章の上奏文、電報、書翰を収集、出版することを通して、今までの李鴻章の「苦心」を世人に認識させ、また李鴻章に対する誹謗を中止させることを考えたのである。

ほかに、1897年7月2日(光緒23年6月3日)に吳汝綸が周馥へ送った書翰にも、「某(吳汝綸)が合肥(李鴻章)文集を添削する理由は、見識のある宰相の令名を大衆の口に埋もれさせたくないことにある。功名の顛末はすべてこの書にあるからである」(某区区欲刪定合肥文集、不欲使賢相身后令名淹沒於悠悠之口、以為功名本末具在此書也)¹⁷と言い、李鴻章文集を出版する重要な目的は李鴻章の真価を後世に残すためであると明示している。

そこで、具体的に、吳は1899(光緒25)年に章洪鈞とともに『李肅毅伯奏議』を整理し、上海鴻文書局より石版印刷した。1902(光緒28)年にまた『李文忠公函稿』(17冊、鉛板印刷)と『李文忠公海軍函稿』(2冊、鉛板印刷)を蓮池書社より出版した。本稿で取り扱った『李文忠公事略』も1902年に日本の三省堂書店より刊行され、のちに北洋官報局より重版された。吳の前後の動きから見ると、『李文忠公事略』を世に出したのは、李鴻章に対する誹謗を中止させる意図の一環であったと言えよう。さらに、終始日清関係に苦心惨憺していた李鴻章の経歴を考えると、『李文忠公事略』をわざわざ日本で出版したことを、吳汝綸は望んでいたのかもしれない。

また、李の死後である1908(光緒34)年に、『李文忠公全集』(また『李文忠公全書』と称する、86冊)が金陵で刊行され、これには李文忠公奏稿(80巻)、李文忠公朋僚函稿(20巻)、李文忠公訳署函稿(20巻)、李文忠公遷移蚕池口教堂函稿(1巻)、李文忠公海軍函稿(4巻)、李文忠公電稿(40巻)が含まれている。これらは『李鴻章全集』(安徽教育出版社、2008年、39巻)が出版される前の百年間、李鴻章研究の一次史料で

あった。呉汝綸の努力は、後人に李鴻章研究および清末歴史研究のために重要な史料を残していたのである。

終わりに

本稿は『李文忠公事略』という書物の出版経緯、史料内容を紹介し、呉汝綸が日本を視察した期間の行動について、その一面を明らかにした。

『李文忠公事略』は李鴻章祠堂を建立するために書かれた文章を収めており、李の身近なブレーンや親友（呉汝綸、周馥、盛宣懷）の手によることが判明した。内容から見ると、『李文忠公事略』では李を積極的に評価するものばかりであるが、それでも一次史料として既存の史料を補完、検証することができるという意味で価値は高い。

「売国奴」と批判された李鴻章の像から一步離れて、この史料を通読すると、李鴻章が積極的に西洋の先進的な技術を取り入れた姿、治水事業に取り組んでいた姿、被災者を救済する際、影響力を海外にまで行使して国民を救った姿、自分の毀誉を計算に入れず国のために献身していた姿、まわりのブレーンに終生敬われた姿なども同時に窺い知ることができる。

日清戦争よりすでに 120 年以上も過ぎており、李鴻章祠堂はほかの施設として使われ、あるいは姿を消している。しかし、李鴻章研究にはまだ多数の課題が残されており、研究をさらに深化する必要がある。史料の発掘、利用を通して李鴻章研究も新段階へと深化することが期待される。以下、いくつかの課題を提示し、本稿の終わりとしたい。

まず、先行研究では李鴻章研究は主に外交面を中心に展開されている。これは清朝末期における国際情勢及び「華夷秩序」の崩壊により、中国が大きな変動期に置かれていたことに多くが注目しているためである。他方、内政面における李鴻章研究は主に洋務運動に集中している。しかし、李鴻章が担当した「内政」の中の「民生」（国民の生活、生計）部分に関しては、従来無視されてきた分野である。『李文忠公事略』では、江蘇省の減税問題、河南省の救済活動などの「民生」問題における李鴻章の行動に言及がある。しかし、李が具体的にどのように行動し、さらにどのような効果を得たのか、これらに関しては十分に研究されていない。

次に、李鴻章研究の際、外交文書、上奏文や往復書翰などの一次史料が多く利用されている。しかし、李と同時代に出版された関連書物に対する研究は稀である。本稿で取り扱った『李文忠公事略』はその一例である。ほかに神村忠起、伊笠碩哉らが李の生前に『李鴻章伝』を上梓したが、李と同時代に生きていた人物がいかに李鴻章及び清末社会を描いたのか、管見の限りでは、これらの史料は十分に利用されていない。

さらに、新聞・マスメディアを資料として扱う観点である。張杜生は2009年に『絶版李鴻章』(文匯出版社)を出版し、英、独、露、日、仏の新聞や雑誌の写真を大量に引用し、李鴻章の人生をいきいきと再現している。しかし、この著書は研究書ではなく、個別の歴史事件に対する「詳説」が必要であろう。とはいえ、李鴻章研究に一つの新しい視点を提供してくれた。いわゆる新聞・マスメディアの報道という角度から、李鴻章を見直すという課題である。この意味で李鴻章研究について言えば、「絶版」と称するのはまだまだ時期尚早であろう。

(註)

¹ 趙爾巽ら編『清史稿』第44冊「吳汝綸伝」(中華書局、1977年)13443頁。

² 吳汝綸の日本視察については、以下の先行研究がある。実藤恵秀「吳汝綸の日本視察」(『近代日中交渉史話』春秋社、1973年)、容応莢「吳汝綸と『東遊叢録』—ある「洋務派」の教育改革案—」(平野健一郎編『近代日本とアジア：文化の交流と摩擦』東京大学出版社、1984年)、汪婉『京師大学堂総教習吳汝綸の日本視察』(『中国研究月報』第47巻3号、1993年)、肖朗、王鳴「清末における師範教育の形成に関する一考察」(『歴史のなかの教師・子ども』篠田弘監修、井上知則、加藤詔士、高木靖文編、福村出版、2000年)、許海華「1902年の吳汝綸日本考察について」(『千里山文学論集』第82号、2009年)、鈴木正弘「清末における日本の歴史教育に対する関心の高まり—吳汝綸の日本訪問による成果—」(『アジア教育史研究』第20号、2011年)、董秋艷「日清戦争後中国における日本の女子教育情報：吳汝綸による日本視察(1902)を通して」(『教育史学会紀要』第55号、2012年)等。また中国語で書かれた先行研究として、吳昭謙「吳汝綸考察日本の前前後後」(『文史精華』1999年05期)、趙建民「吳汝綸赴日考察与中国学制近代化」(『檔案与史学』1999年05期)、王鳴「吳汝綸の日本教育視察」(『河北師範大学学报』(教育科学版)2000年02期)、翁飛「吳汝綸与京師大学堂」(『安徽大学学报』2000年02期)、丁麗「吳汝綸赴日考察述評」(『高校社科動態』2009年02期)、孫德玉「吳汝綸赴日考察对中国近代教育的影响」(『安徽師範大学学报』(人文社会科学版)2009年03期)、程大立「吳汝綸对日本図書館的考察和認識」(『淮北師範大学学报』(哲学社会科学版)2013年01期)等が挙げられる。

³ この史料は以下の図書館において閲覧することができる。国立国会図書館、東洋文庫、一橋大学、名古屋大学、東北大学、早稲田大学、神戸大学、明治大学。

⁴ 馬良春、李福田編、『中国文学大辞典』第5巻(天津人民出版社、1991年)2935頁。なお吳閔生

の生没年についてはいくつかの説があり、統一されていない。『安慶人物伝』には 1879-1950 年という記載がある（黄山書社、2001 年）。

⁵ 前掲実藤恵秀『近代日中交渉史話』252-253 頁。

⁶ 『日本人名大事典』（新撰大人名辞典）第 2 巻（平凡社、1979 年）172 頁。

⁷ <http://www.books-sanseido.co.jp/company/history.html> 2014 年 7 月 25 日アクセス。

⁸ 実藤恵秀『中国人日本留学史』（くろしお出版、1970 年）313 頁。

⁹ 華北訳書局編『東游日報訳編』1903 年、東京都立図書館所蔵、実藤文庫 53 号。

¹⁰ 吳汝綸撰、施培毅、徐寿凱校訂『吳汝綸全集』第 1 巻（黄山書社、2002 年）451 頁。

¹¹ 周馥『周愨慎公自訂年譜』（広文書局、1971 年）58-65 頁。

¹² 『朝日新聞』1902 年 11 月 12 日朝刊・東京、第 8 版。

¹³ 『東游叢録』は 1903 年に商務印書館より再度出版された。

¹⁴ 同注 10、第 3 巻、105 頁。

¹⁵ 華北訳書局編『東游日報訳編』、『日出国新聞』1902 年 10 月 24 日、66 頁。

¹⁶ 同注 10、第 3 巻、134 頁。

¹⁷ 同注 10、第 3 巻、152 頁。